# 銃後の留守宅

植村周子（海神・77歳）

三人の子等を守りて今日も過ぐ夫は南のバタビアに在り

つはものにあらねど夫は使命帯び南十字星を夜ごと仰ぐと

海軍の役目一つをもつといふバタビアの夫の便り滞る

バタビアより送金されてくるわがくらし来るべき便りの今日も届かぬ

何時しらに便り届かずなりにけり今日は戦艦の大和沈みぬ

みはるかす焼野となれる錦糸町真黒に残れる並木怖ろし

焼け残る両国三中の入学式焼死の骸(むくろ)踏みて子とゆく

夜な夜なの空襲ひまなく今宵はも高円寺なるわが実家(さと)焼きぬ　（五月六日）

弟の博士論文明日の日に提出さるるが皆焼かれけり

わが実家(さと)の宝なるもの国宝の銘刀虎徹(こてつかこつるべ)釣焼失

刀剣の幾振りなべて焼きやかれこの家の財の一時に失す

焼かれたる銘刀の刃の無惨なるをなほも米軍召してゆきけり

みいくさの勝利を胸に臍噛(ほぞ)むに八月十五日玉音きけり

玉音の湿りて震ふをききにつつしばしはありぬ己れ虚脱に

留守宅は如何にありやと縮緬の羽織差し出し切符を求む

無秩序となりたる列車にひしめきあひ窓よりやうやく乗り込みたりき

終戦の後の大事は預金封鎖手に握りしは五百圓のみ

幼等(おさなら)のやせ細りゆき吾が着物三十枚は食糧に替ふ

既にしてレッドパージと覚悟せるを二十一年の秋夫の帰り来

台湾銀行に預金のあれど敗戦となりて一銭も払ひ戻しなき

リュックサック背中に千円の札一枚ポケットより出す帰還者の夫

四倉のぢぢ様ひらめを持ちくれて配給の酒酌み交しけり

帰り来し夫に仕事のあるはずもあらねど日毎東京へゆく

世に謂へる竹の子生活の日々にして箪笥に残るは紋付袴

栄養の不良のための吾がむくみ戦後十年やうやくとれにき